接触場面における日本語母語話者のアコモデーション・ストラテジーについて

―非母語話者との接触経験に注目して―

雷　雲恵・川口　良

Accommodation Strategies of Native Japanese Speakers in Contact Situations:

Focusing on Contact Experiences with Non-Native Speakers

Lei Yunhui, Ryo Kawaguchi

【要旨】

本文是针对雷（2022、2023）中得到的，随着NS与NNS日常生活中的接触经验的增多，NS能够灵活有效地根据NNS日语能力对“句子调整”、“领先接话”的沟通技巧进行调整的调查结果，从“沟通适应理论（CAT）”提出的“收敛”、“分歧”和“维持”的观点出发，力求从理论上对该调查结果做出尝试性地解释。在接触经验少的NS“句子调整”的结果中，NS在面对日语能力不同的NNS时都使用了短句。在面对初中级NNS时，NS认知方面想要与NNS进行有效沟通的“收敛”策略起了作用；而面对上级NNS时，NS仍惯性思维地假定了NNS日语能力较低的身份，从而导致了会话中出现了“过度收敛”。而“过度收敛”也可以理解为远离对方话语体系的“分歧”策略。其次，在“领先接话”的结果中，作为“协助工具”来使用的NS所有“领先接话”几乎都可以被解释为NS在“认知方面”采取的一种“收敛”策略；而面对前句中NNS未出现迟疑、停顿、修正等时NS不使用“领先接话”的现象，我们认为这是NS对自我话语风格的“维持”策略。其次，在接触经验多的NS“句子调整”和“领先接话”的结果中，NS能够根据NNS的日语能力采取不同的适合的沟通策略。这是由于NS在“认知方面”上有着与NNS进行有效沟通的认知，在“情感方面”有着缩短与对方的心理距离的希望，我们认为两个方面的“收敛”策略在沟通中起到了作用。由此可见，随着NS与NNS日常生活中的接触经验的增多，从“认知”到缩短心理距离的“情感”两个方面，可以说NS的“收敛”策略都得到了发展与提升。

1. はじめに

日本に在留する外国人の数は、2022年末に過去最高を更新し、初めて300万人を超えて307万5,213人に達した[1]。国籍・地域は195にわたる。このような現状を考えると、日本社会は多文化化・多言語化が急速に進みつつあることが推測される。そのような日本社会のグローバル化、日本語使用者の多様化にともない、「多文化共生社会」の実現は、日本社会にとってこれまで以上に喫緊の課題として捉えられよう。

「多文化共生社会」の実現のためには、庵（2016）が述べるように、外国人を「ともに日本社会を作っていくパートナー」と見なし、「日本語を使った外国人とのコミュニケーションを普通のこととして受け入れる」ことが重要である（p.13）。これまで日本社会は、一方的に外国人の非母語話者側に日本語の習得及びコミュニケーション上の調整を求めてきた。しかし、コミュニケーションの参加者が日本語母語話者と非母語話者の双方である以上、その当事者である日本語母語話者側にもコミュニケーション上の調整が求められるべきであることは言うまでもない（池田2004、柳田2015、など）。

母語話者（以下NS）と非母語話者（以下NNS）が参加するコミュニケーション場面は「接触場面」と呼ばれ、NSがNNSとの接触場面で用いる言語変種は「フォリナー・トーク」（Ferguson 1981）と言われる。接触場面においてNSがNNSに対して用いるフォリナー・トークの実態を明らかにすることは、「多文化共生社会」の実現に向けて、日本語母語話者側に求められるコミュニケーション上の調整を考える上で、有効な示唆を与えると考えられる（柳田2015）。

日本語のフォリナー・トークについては、多くの先行研究があるが

1 「令和４年末現在における在留外国人数について」出入国在留管理庁 moj.go.jp、（2023年８月29日閲覧）

（スクータリデス1981、志村1989、ロング1992a・1992b、御舘1998、など）、近年、日本語教育の経験のない一般の日本語母語話者に注目し、NSのNNSとの接触経験がフォリナー・トークに及ぼす影響を明らかにしようとする研究が進みつつある（筒井2008、柳田2015、平山2019、雷2021・2022・2023、など）。これらの研究は、いわば、NNSとの接触経験によって自然習得されるNSのフォリナー・トークを解明しようとするものと言える。中でも、平山（2019）、雷（2021・2022・2023）は、NS側のNNSとの接触経験の多寡に加え、NNS側の日本語能力の違いに注目し、NS、NNS両者それぞれの要因がフォリナー・トークに与える影響を明らかにしようとしている。

一方、相手が自分の言語に熟達していない場合に、相手の言語能力に合わせて自分の言語を調整しようとするフォリナー・トークの現象を説明するには、言語社会心理学における「コミュニケーション・アコモデーション理論」（Communication Accommodation Theory：以下CAT）が有用と考えられる。CATは、Giles et al.（1987）が言語社会心理学の見地から、人は相手によって話のスタイルを適応（accommodate）させることが多いという観察に基づき、理論化したものである（林編2008）。「アコモデーション」とは、個人のコミュニケーション行動を変化させることによって、他者との社会的距離を近付けたり遠ざけたりすることである（Giles & Ogay 2007）。コミュニケーションを調整する方法として、コミュニケーション行動（言語的・非言語的行動）を相手に近付けようと調整する「収束（convergence）」、自分と他者の言語的・非言語的差異を強調して相手から遠ざかろうと調整する「分岐（divergence）」、調整せず話者自身のコミュニケーションスタイルをそのまま継続する「維持（maintenance）」がある（Giles et al. 1991、Giles & Ogay 2007、林編2008、栗林2010、など）。また、Gasiorek（2016）は、CATとはコ

ミュニケーションの参加者が状況に合わせて調整する方法とその理由について説明する理論であるとし（p.26）、Dragojevic et al.（2016）は、人々の調整する動機と調整能力の間には固有のテンションがあり、調整への動機や調整能力によって調整の程度や質は異なることを指摘している（p.46）。

以上のことから、CATは、NSのNNSとの接触経験の違いとNNSの日本語能力の違いによるNSの言語調整行動を解釈するための有用な理論であると考えられる。本稿では、雷（2022・2023）が明らかにした、NSがNNSとの接触経験によって身に付けた、NNSの日本語能力に応じたフォリナー・トークについて、CATを用いて解明することを目指す。NNSとの接触経験やNNSの日本語能力によって、なぜNSの調整行動が異なるのか明らかにすることは、「多文化共生社会」の実現へ向けてさらなる示唆を得ることが可能になると考える。

以下では、２節で、CATを用いて日本語のフォリナー・トークを分析した先行研究を概観し、それを踏まえて本稿の研究課題を設定する。次に、３節で、雷（2022・2023）によって明らかにされたNSの調整ストラテジーについて述べ、４節で、それぞれのストラテジーについてCATの観点から談話分析の手法を用いて考察する。５節で、まとめを行い、今後の課題について述べる。

２．CATを用いた日本語フォリナー・トーク分析の先行研究及び本研究の課題

オストハイダ（1999・2001・2005）は、コミュニケーション行動と言語外的条件（年齢、人種、障害などによる外見的特徴）の関係を明らかにするために、アンケート／インタビュー調査（オストハイダ1999・2001）及び、実際の行動の観察調査（オストハイダ2005）を実施し、その結果について、CATの枠組みのうち「過剰適応」を援用して考察して

いる。オストハイダ（1999）は、外国人インフォーマント115人を、まず、外見によって「外国人と判断しにくい人（中国、韓国、日系など66人）［同］」「明らかに外国人と判断できる人（ドイツ、インド、ケニアなど49人）［異］」に分け、さらに、日本語能力によって「高低」のグループに分けて、［同低］、［異低］、［同高］、［異高］の４つのグループを対象として意識調査を行った。その結果、外国人に対して話す時、「多くの母語話者は、外国人聞き手の真の日本語能力を確認せず、外見的判断（または、話し相手は外国人である）という意識等により、聞き手の言語能力には限界があるということを話す前から前提とし、外国人相手談話的言語行動（他言語、簡略化された言語目録）を用いる。更に、会話の途中でも外国人話し相手の真の言語能力に準じず、外国人相手談話的言語行動を用い続ける母語話者も少なくない。」（p.90）と述べ、前者を「言語外的条件と言語能力の想定の関係」、後者を「過剰適応」と名付けている。オストハイダ（2001）では、「対外国人言語行動」に加え「対障害者言語行動」についてもアンケート／インタビュー調査を行い、その結果を、CATの理論的枠組みの「過剰適応（Hyperaccommodation）」[2]に当たるものとして論じた。オストハイダ（2005）は、オストハイダ（1999・2001）の意識調査に基づいて、「外国人／車椅子使用者に対する第三者返答」について、実際の行動の観察調査を実施している。「第三者返答」を「話し手が、話しかけてきた話し相手が有する外見的特徴などの言語外的条件に基づき、（話し相手との意思疎通に問題がないにも拘わらず）その話し相手を無視し、話し相手と一緒にいる第三者に返答する」（p.39）と

2 オストハイダ（2001）は、「過剰適応（Hyperaccommodation）」を「ある話し手が何らかの言語外的／内的条件（に対する意識）により自分の言語行動を聞き手に合わせる必要があると想定し、自分の言語行動を変える（話し手の意識によるコンバージェンス）。だが、聞き手からは、話し手の行動は適切ではないと解釈される（聞き手の解釈によるダイバージェンス）。その結果、両者のコミュニケーションに何らかの不満が起こりうる。」（p.47）と定義している。

定義し、それを、CATの観点から「過剰適応」（overaccomodation）の一種として考察した。その結果、外見的特徴が顕著である外国人に対する第三者返答の存在を確認し、それを引き起こす要因として、話し手が抱く意思疎通の可能性に対する想定や外国人の言語能力に関するステレオタイプという先入観を指摘している。

池田（2004）は、フォリナー・トークの実態を明らかにするために、NSと中級NNSによる20組の電話会話を対象として、NSのフォリナー・トーク使用を量的に分析し、アコモデーション理論を用いて質的に分析した。NSは、NNSの日本語力の低さを認知した場合にフォリナー・トークの使用量が多くなり、「収束」ストラテジーを用いるのに対して、外国人の「異質性」を認知した場合にはフォリナー・トークをほとんど用いず、「分岐」ストラテジーを使用する可能性があることを指摘している。

平山（2019）は、NSが接触場面と母語場面で用いる「くり返し」に注目し、接触経験の多いNS 4名及び少ないNS 4名と、上級学習者、中級学習者、母語話者それぞれ同一の1名との初対面会話を分析した。その結果、「くり返しは相手に近づこうとする感情的側面からも相手とのコミュニケーションを促進しようとする認知的側面からも、「収束」のストラテジーである」（p.246）と結論付けている。

以上のことから、NSのNNSとの接触経験の多寡という観点からNSの言語調整についてCATを用いて分析した研究は平山（2019）のみであり、その平山（2019）も、「くり返し」という言語調整のみに限っていることが分かった。以上の先行研究の成果と限界を踏まえ、本稿では、雷（2022・2023）が明らかにした、NSのNNSとの接触経験によって身に付けた、NNSの日本語能力に応じた日本語の調整ストラテジーのうち、「一発話の調整」及び「先取り発話」について、CATを用いて解明

することを目的とする。現在CATが扱う範囲は広く、林編（2008）では「さらに最近では、社会言語的なコード、スタイル、ストラテジーの選択の際の文脈的プロセスを説明する理論として発展してきた」（p.241）とされる。アクセント、言語コード、発話速度、トピック、談話管理行動（discourse management behaviors）などのさまざまな言語的、非言語的コミュニケーション行動に加え、異文化間や世代間、さらにコンピューターを介した相互行為など、幅広い分野において応用され、言語調整の理論化へ向けて、より広範囲かつ包括的なアプローチが行われている（Gasiorek 2016：p.27）。相手の言いたいことを予測して先取りして述べる「先取り発話」は、談話管理行動による言語調整であり、相手に適合させるためのコミュニケーション行動、すなわちアコモデーション・ストラテジーと考えられることから、本稿では、「一発話の調整」とともに「先取り発話」をCATの枠組みを用いて分析することにする。

本稿では、「収束（convergence）」「分岐（divergence）」「維持（maintenance）」の各調整方法を「アコモデーション・ストラテジー」と呼ぶことにして、研究課題を以下のように設定する。

研究課題：NSのNNSとの接触経験は、CATにおける「収束」、「分岐」、「維持」のアコモデーション・ストラテジーとどのように関係しているか。

3．雷（2022・2023）におけるNSの「一発話の調整」「先取り発話」の調整ストラテジー

雷（2022・2023）は、一般のNSのNNSとの接触経験の多寡とNNSの日本語能力の違いがNSのフォリナー・トークに及ぼす影響について明らかにすることを目的として、接触経験の多いNS（Native Speakers-

Experienced）８名と少ないNS（Native Speakers-Non Experienced）８名[3]のそれぞれが上級NNS 16名、初中級NNS 16名[4]とペアとなったロールプレイ調査を実施して、収集された合計32組、約320分の談話資料を分析対象としている。

雷（2022）では、NSの「一発話の調整」について、NSの一発話の「長さ」と「話者交替」に注目して分析を行った。その結果、接触経験の少ないNSは相手の日本語能力に関係なく同じ長さで一発話を用いるのに対して、接触経験の多いNSは上級NNSには初中級NNSに対するよりも長い一発話を用いることが分かった。次に、一発話における「話者交替」に注目して一発話を分類し、分析した。その結果、接触経験の少ないNSはNNSの日本語能力に関わらず、終止形で終わる短い一発話を用いるのに対して、接触経験の多いNSは上級NNSに対しては従属節を含んだ長い一発話を一気に話そうとし、初中級NNSに対しては短い一発話の中でもNNSの理解を確認するために意識的に「間」を置いて「話者交替」を行っていることが分かった。

雷（2023）では、NSによる「先取り発話」について、生起頻度、NNSの「発話遂行滞り[5]」、先行発話の「情報の帰属」という３点から分析を行った。まず、接触経験の少ないNSは多いNSより「先取り発話」が少なく、上級NNSより初中級NNSに対する方が「先取り発話」

3　雷（2022・2023）では、「接触経験の多い」NSを「普段から外国人と日本語で話す経験があり、その頻度が週に１回以上で毎回の発話量が十分にあり、さらに普段日本語で話す親しい外国人の友人がいるNS」とし、「接触経験の少ない」NSを「日本語による外国人との会話経験がほとんどなく、日本語で話す親しい外国人の友人がいないNS」としている。

4　雷（2022・2023）では、「上級NNS」を「日本語学習時間が800時間以上、来日して２年以上で、日本語能力試験N1合格あるいはN1に相当する能力が認められるNNS」とし、「初中級NNS」を「来日して約1年、日本語学習時間が300時間から600時間で、日本語能力試験N3合格あるいはN3に相当する能力が認められるNNS」としている。

5　雷（2023）では、先取り発話の先行発話において、音の引き延ばし・長い「間」・「なんか」「あのう」といったフィラー・「笑い」などが後行話者の発話の直前に、または、複数回現れる場合、言い直しや発話遂行が困難な状態が明示的に示される場合を、「発話遂行滞り」と認定している。

が多いのに対して、接触経験の多いNSは、相手の日本語能力に関係なく「先取り発話」を多用することが分かった。また、接触経験の少ないNSは相手の日本語能力に関わらず、NNSに「発話遂行滞り」が現れてから「先取り発話」を行うのに対して、接触経験の多いNSはNNSに「発話遂行滞り」がなくても「先取り発話」を多用することが分かった。さらに、先行発話の「情報の帰属」によって分類し、分析した結果、接触経験の少ないNSは、初中級NNSの発話が滞った場合に「相手に帰属する情報」を「助け舟」として先取りするのに対して、接触経験の多いNSは、NNSの日本語能力に関わらず、「共有された情報や一般知識」を活用して「先取り発話」を多用し、「共同発話」を成立させていることが分かった。

４．CATから見たNSの日本語調整ストラテジーの考察

以上の雷（2022・2023）から、NSはNNSとの接触経験によって、NNSの日本語能力に応じた効果的な「一発話の調整」を行うようになること、NNSと協働して「共同発話」を成立させる「先取り発話」を多用するようになることが確認された。この結果に基づき、接触経験の多寡に違いのあるNSが、CATの観点から「収束」「分岐」「維持」のアコモデーション・ストラテジーをどのように用いているか、質的に談話を分析して考察することにする。4.1で接触経験の少ないNSの場合、4.2で接触経験の多いNSの場合、それぞれの「一発話の調整」と「先取り発話」の調整ストラテジーについて、CATの枠組みを援用して論じる。

４.１　接触経験の少ないNSの場合

まず、接触経験の少ないNSの日本語調整ストラテジーについて、CATの枠組みにおけるアコモデーション・ストラテジーによる解釈を試みる。4.1.1でNSの「一発話の調整」、4.1.2でNSの「先取り発話」につ

いて考察する。

4.1.1　NSの「一発話の調整」に見るアコモデーション・ストラテジー

先述したように、雷（2022）ではNSの「一発話の調整」について、接触経験の少ないNSは、相手の日本語能力に関わらず、終止形で終わる短い一発話を用いていることが分かった。以下にそれを示す談話例を挙げる。

例１は初中級NNSとの会話である。

例１（NSN5：接触経験の少ないNS、NNSj：初中級NNS）

→68　NSN5　でも、もし羊を見たいのであれば、千葉にもいます。

69　NNSj　ああ、千葉も＜いますか？＞ {<}。

70　NSN5　＜はい＞ {>}。

71　NNSj　ふーん。

→72　NSN5　あのう、農場が（うん）ここにもあります。

73　NNSj　ああ、そうですか＝。

ここでは、NSN5がNNSjの「故郷にいる羊を見たい」という要望に応じて千葉の農場について紹介している。NSN5は68「でも、もし羊を見たいのであれば、千葉にもいます」と「千葉」の説明を始め、72で「あのう、農場がここにもあります」と千葉にも農場があることを伝えている。この68「でも、もし羊を見たいのであれば、千葉にもいます」は従属節を含む１文の発話であり、72「あのう、農場がここにもあります」は短い単文による１発話で、どちらも終止形で終了している。

例２は上級NNSとの会話である。

例２（NSN5：接触経験の少ないNS、NNSJ：上級NNS）

→233 NSN5　えっと、鬼怒川⁇。

234 NNSJ　ああ、その温泉＜有名なところですね＞ {<}。

→235 NSN5　＜そう＞ {>}、温泉が有名です。

236 NNSJ　はい。

237 NSN5　あと【[。

238 NNSJ　】]もみっ紅葉ですか、あっ紅葉がない⁇。

→239 NSN5　紅葉もあり＜ます＞　{＜}。

240 NNSJ　＜あり＞　{＞}　ます、はい。

ここでは、NSN5がNNSJに栃木県の鬼怒川について紹介している。NSN5が233「えっと、鬼怒川⁇」と上昇イントネーションによって相手に確認要求をしたのに対して、NNSJが234で鬼怒川は温泉が有名だと答え、その途中でNSN5は235「そう、温泉が有名です」と同意している。続いてNSN5が説明を続けようとしたところで、NNSJが238「もみっ紅葉ですか、あっ紅葉がない⁇」と質問したので、NSN5は239「紅葉もあります」と答えている。このようなNSN5の233「えっと、鬼怒川⁇」、235「そう、温泉が有名です」、239「紅葉もあります」の発話は、終止形で終わる短い単文からなることが分かる。

このように、接触経験の少ないNSは、初中級NNS同様に上級NNSに対しても1TCU[6]からなる短い単文の発話を続け、その１文が終わったところ、または終わりそうなところで、NNSがターンを取る様子が、統計的に有意に多く観察された。

CATによって英語のフォリナー・トークの解明を試みたZuengler（1991）は、NSがNNSの第二言語能力が低い側面を認知した場合、フォリナー・トークが量的に多くなり、「収束」ストラテジーが多く観察される（pp.237-238）という結果を報告している。また、池田（2004）も同様に、NSがNNSの日本語力の低さを認知した場合にフォリナー・

6 TCUとは「ターン構成単位（Turn Constructional Unit）」のことで、「話者交替」が発生するまでの発話部分が１つの発話順番を構成する言語的単位である（サックス他2010［1974］）。

トークの使用量が多くなり、「収束」ストラテジーを用いると述べている。NSが初中級NNSに対して1TCUで構成され終止形で終わる一発話を多用するのは、「個人が自分の広範な言語的（発話レート、アクセント）、パラ言語（休止、発話の長さ）、非言語的特徴（微笑み、凝視）といった行動を、対話者の行動と類似したものになるように調整する」（栗林2010：p.13）「収束」のストラテジーとして解釈される。NSは、NNSの日本語能力が十分でないことを認識して[7]NNSの発話形式に合わせて調整し、すなわち「収束」ストラテジーによって、１文を短くして終止形で終わらせたものと考えられる。

さらに、CATの枠組みでは、相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積り、それに基づいて自身の発話を調節してコミュニケーションを効率的に進めようとする「認知面」での調整と、アイデンティティを管理し、相手との社会的距離を縮めて心理的に近づこうとする「感情面」での調整があるとされる（Gasiorek 2016: p.27、Dragojevic et al. 2016: pp.42-43）。NSが初中級NNSに対して終止形で終わる短い一発話を多用するのは、相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積ってコミュニケーションを効率的に進めようとする「認知面」での「収束」と捉えられるだろう。

一方、NSが、初中級NNS、上級NNSのどちらに対しても、終止形で終わる短い一発話を用いるのは、オストハイダ（1999）が、「会話の途中でも外国人話し相手の真の言語能力に準じず、外国人相手談話的言語行動を用い続ける」（p.90）傾向を指摘して「過剰適応」と呼んだ言語調整と考えられる。この「過剰適応」について、林編（2008）は、「話し手の主観的収斂（引用者注：「収斂」は「収束」のこと）が、相手に

7　フォローアップ・インタビューにおいて接触経験の少ないNSは、「最初の５分（ロールプレイ実施前の自由会話の段階）でNNSの日本語能力の違いに気づいた」と述べていた。

とっては拡散（引用者注：「分岐」のこと）と受け取られる場合もある。また、収斂が相手に対する配慮や連帯意識ではなく、相手の属性に対する偏見やステレオタイプに基づいて行われる場合にも、その受け止められ方に食い違いが生まれることがある。そのような場合には「過剰適応（overaccommodation）」と言われる現象が観察されることが多い」（p.245）と述べている。また、栗林（2010）はアコモデーションに対する受け手側の評価について、「収束」する話者は多くの場合、「分岐」する話者よりも受け手に好意的に評価されるが、「過剰収束（over convergence）」は、評価を低めることがあることを指摘している（pp.15-16）。学習者の日本語能力レベル別にフォリナー・トークに対する好感度を調査した坂本他（1989）は、学習者の日本語能力が上がるにつれて、ゆっくりと話したり短文を並べたりするのは好感度が下がることを報告している（p.136）。

本研究の実験後のフォローアップ・インタビューでは、実験に参加するすべてのNSが「ロールプレイ実施前の自由会話の段階で、すでに対話相手の日本語能力の違いに気付いた」という発言をしていた。しかし、接触経験の少ないNSは、ロールプレイ会話に進んでも、上級NNSに対しても「終止形で終わる短い一発話」を使い続けていたことから、接触経験の少ないNSによる「一発話の調整」は、外国人話し手の日本語能力の低さを想定したステレオタイプに基づく「過剰適応／過剰収束」（以下、「過剰収束（over convergence）」とする）として解釈できる。つまり、接触経験の少ないNSは、NNSに情報を提供する際にNNSが自分の話を理解しているかどうか確信が持てず、NNSの情報理解に対して恒常的に不安があるのではないか。そのため、対話相手の日本語能力に関わらず「対外国人言語行動」（オストハイダ1999・2001）を取り続け、上級NNSに対しても「過剰収束」という「一発話の調整」を行っ

たことが推測される。

以上のことから、接触経験の少ないNSが初中級NNSに対して、1TCUによる終止形で終わる一発話を多用するのは、「認知面」での「収束」ストラテジーと解釈され、上級NNSに対しても、初中級NNS同様に一発話が終止形で終わる短い発話を用いるのは、「過剰収束」の現象として捉えられるだろう。この「過剰収束」は、上級NNSには「分岐」と受け取られ、「両者のコミュニケーションに何らかの不満が起こりうる」（オストハイダ2001: p.47）可能性があるものと言える。

4.1.2　NSの「先取り発話」に見るアコモデーション・ストラテジー

次に、雷（2023）では、接触経験の少ないNSは、接触経験の多いNSより「先取り発話」が少なく、相手の日本語能力に関わらず、NNSの先行発話に「発話遂行滞り」が現れてから「先取り発話」を行うことが分かった。以下に談話例を示す。

例３は初中級NNSとの会話である。

例３（NSN1：接触経験の少ないNS、NNSb：初中級NNS）

175　NSN1　うーん、でも、どっちのほうが安いんだろう＜笑い＞。
176　NNSb　＜笑い＞。
177　NSN1　飛行、あっでも、飛行機のほうが安いのかなあ、たぶん。
→178-1 NNSb　インターネットでー„
179　NSN1　ああ、そうですそうです。
→178-2 NNSb　チェックー【【。
⇒180-1 NSN1　】】チェックして„
181　NNSb　はい。
⇒180-2 NSN1　どっちのほうが安いかなって＜笑い＞„
182　NNSb　＜笑い＞。

⇒180-3 NSN1　確認して、行くのもありかなあって…＜笑い＞。

183　NNSb　＜笑い＞。

ここでは、NSN1がNNSbに、大阪へ旅行に行く時の新幹線と飛行機のチケットを比較して説明している。NSN1が175と177で、「飛行機のほうが安い」ことを推測している。NNSbの178-1「インターネットでー」、178-2「チェックー」で音の引き延ばしが生じたため、NSN1は180-1「チェックして」、180-2「どっちのほうが安いかなって」、180-3「確認して、行くのもありかなあって…」とNNSbが言いたいことを続けている。NNSbの先行発話178-1、178-2に音の引き延ばしという「発話遂行滞り」が現れたため、NSN1は、会話進行を助けるために、引用形式を示す「って」を用いてNNSbの言いたいことを先取りして代弁していると考えられる。

例４は上級NNSとの会話である。

例４（NSN5：接触経験の少ないNS、NNSJ：上級NNS）

110 NSN5　神奈川、そうですね。

111 NNSJ　はい。

→112 NNSJ　東京のー（うん）、あのう、周辺はー。

⇒113 NSN5　東京の周辺は、もう本当にいっぱいあるんですけれど、あのう、外国人の観光客が多いのは、浅草と、原宿とか＜しんっ＞ {<} 【【。

114　NNSJ　】】＜あっはら＞ {>} じゅく。

115　NSN5　原宿。

116　NNSJ　わからないです。

ここでは、NSN5がNNSJに神奈川について紹介した後、NNSJがNSN5に東京周辺の観光地を聞いている。NNSJが112「東京のー、あのう、周辺はー」と言って、フィラーと音の引き延ばしが生じたところで、

NSN5が発話の続きを先取りして113「東京の周辺は、もう本当にいっぱいあるんですけれど、…」と続けている。例4では、NNSJの先行発話112にフィラーと音の引き延ばしという明確な「発話遂行滞り」が現れており、NSN5は、会話進行を助けるために答えを先取りしていると考えられる。

例３、例４では、接触経験の少ないNSは、NNSの先行発話に滞りが生じた時点で、続きの発話内容を予測して、NNSの言いたいことを引用形式を用いて代弁したり、NNSの聞きたいことに答えたりしていた。このように、接触経験の少ないNSは、初中級NNS、上級NNSどちらに対しても、先行発話NNSの発話に明確な滞りが現れてから、NNSの発話産出を助け、会話を順調に進めるために先取りしている様子が、統計的に有意に多く観察された。

CATの枠組みでは、前述したように、相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積り、それに基づいて自身の発話を調節してコミュニケーションを効率的に進めようとする「認知面」での調整と、相手との心理的距離を縮めようとする「感情面」での調整が考えられる。接触経験の少ないNSが、相手の日本語能力に関わらず、NNSの発話が滞った場合に「先取り発話」を用いるのは、NSが「NNSの低い第二言語能力の側面」を認知して、相手のコミュニケーション上のニーズを見積り、「先取り発話」を「助け舟」として用いてNNSの発話産出を助けることによって、コミュニケーションを効率的に進めようとする「認知面」での「収束」ストラテジーが働いたためと解釈される。

さらに、雷（2023）では、接触経験の少ないNSが、初中級NNSに対しては「先取り発話」を49回用いていたのに対して、上級NNSに対しては24回しか用いていないことも分かった。これは、初中級NNSの発話には滞りが現れやすく、それを助けるための「助け舟」として「先取

り発話」を多く用いるのに対して、上級NNSの発話には滞りが少ないため、助け舟として「先取り発話」を用いる必要がなかったためと考えられる。つまり、接触経験の少ないNSは、上級NNSに対しては、発話の滞りがない場合は「先取り発話」の使用を控え、相手の言うことを最後まで聞いてからターンを取ることが推測される。

これを示す談話例を以下に挙げる。例5は上級NNSとの会話である。

例５　（NSN3：接触経験の少ないNS、NNSF：上級NNS）

→76-1 NNSF　もうー、ここ、あのう、行けばいつの、あのう、季節??„

77　NSN3　はい。

→76-2 NNSF　どんな季節に（ああ）、あのう、行けばいい？。

⇒78-1 NSN3　えっと、おすすめは春„

79　NNSF　春。

⇒78-2 NSN3　が＝。

⇒80-1 NSN3　＝あとはあと、秋には„

81　NNSF　秋、＜はい＞　{＜}。

⇒80-2 NSN3　＜紅葉が＞　{＞}　„

82　NNSF　あっ。

⇒80-3 NSN3　見れるんで、それはもっときれいです【【。

この前に、NNSFは江ノ島に行ったことがあることを話しており、76-1と76-2で江ノ島へ行くのに最適な季節を質問している。それに対してNSN3は、78-1「えっと、おすすめは春」、78-2「が」、80-1「あとはあと、秋には」、80-2「紅葉が」、80-3「見れるんで、それはもっときれいです」と説明して情報を提供している。このようにNSは、NNSの質問76-1、76-2では「先取り発話」を使用せず、NNSの質問を最後まで聞いてからその質問に答えるというように、「質問－応答」の発話連鎖の中で情報をNNSに提供する様子が観察された。自分が持つ情報に関する

質問をされた場合に、相手の質問を最後まで聞いてから答えるという「質問－応答」の発話連鎖は、接触経験の多いNSにも見られた。しかし、接触経験の少ないNSには、自分が持つ情報に関する相手の質問を先取りして自分の情報を提供するという「先取り発話」は、ほとんど見られず、８名中１名が４例用いただけであった。

池田（2004）は、母語話者が外国人の「異質性」を認知した場合にはフォリナー・トークをほとんど用いず、「分岐」ストラテジーを使用する可能性があることを指摘している。しかし本稿において、接触経験の少ないNSが相手の日本語能力に関わらず、「助け舟」以外には「先取り発話」を用いないのは、相手から遠ざかろうとする「分岐」ストラテジーが働いたと言うより、NNSの発話が滞らない場合は助けを必要としていないと判断し、「先取り発話」によって相手の発話を遮らないという「配慮」が働いたことによるのではないだろうか。接触経験の少ないNNSが「助け舟」以外は「先取り発話」の使用を控えるのは、そのような「配慮」から「質問－応答」という隣接応答ペアの形式を堅持するためと考えられ、そのような意味で、「維持」ストラテジーが機能していると言えよう。以上のことから、接触経験の少ないNSによる「先取り発話」は、「助け舟」として用いる場合は「認知面」での「収束」ストラテジーとして機能し、その使用を控える場合は、話者自身のコミュニケーションスタイルをそのまま継続する「維持」ストラテジーとして機能していると考えられる。

４.２　接触経験の多いNSの場合

次に、接触経験の多いNSの調整ストラテジーについて、CATの枠組みにおける「収束」「分岐」「維持」の各ストラテジーによる解釈を試みる。4.2.1でNSの「一発話の調整」、4.2.2でNSの「先取り発話」について述べる。

4.2.1　NSの「一発話の調整」について

雷（2022）では、接触経験の多いNSは、上級NNSには初中級NNSに対するよりも長い一発話を用いること、上級NNSに対しては従属節を含んだ長い一発話を一気に話そうとし、初中級NNSに対しては短い一発話の中でも意識的に「間」を置いて「話者交替」を行うことが分かった。以下にそれを示す談話例を挙げる。

例６は初中級NNSとの会話である。

例６　（NSE1：接触経験の多いNS、NNSa：初中級NNS）

→61-1 NSE1　夏に着るのは„

62　NNSa　はあ。

→61-2 NSE1　夏に着るのは、浴衣ってゆって„

63　NNSa　ああ。

→61-3 NSE1　軽い??„

64　NNSa　*《沈黙１秒》*。

→61-4 NSE1　けっこう薄い??„

65　NNSa　ああ、はい。

→61-5 NSE1　やつなの。

66　NNSa　はい。

ここでは、NSE1がNNSaに浴衣と着物の違いについて説明している。NSE1は61-1で「夏に着るのは」と言ったところで「間」を置き、浴衣の説明を開始する。NNSaの62「はあ」という反応を得たNSE1は61-2「夏に着るのは、浴衣ってゆって」と本題の浴衣を持ち出した後、再び「間」を置いている。それに対してNNSaが63「ああ」と理解を示したので、NSE1は61-3で「軽い??」と語尾を上げて、NNSaの反応を待っている。しかし、NNSaの１秒の沈黙から、NSE1はNNSaが理解していないと思って61-4「けっこう薄い??」と言い換え、語尾を上げて、相手の

理解を確認している。NNSaが65「ああ、はい」と答えて理解を示したことから、NSE1は61-5で「やつなの」と一発話を完結させた。このようにして、NSE1は「間」を置くことによって、自発的に「話者交替」を行っていることが分かる。

このように、接触経験の多いNSは、初中級NNSに対して話す時は、一発話を区切り、意識的に「間」を置いて、相手の理解を確認しながら発話を進めていく様子が、統計的に有意に多く観察された。

例７は上級NNSとの会話である。

例７（NSE2：接触経験の多いNS、NNSC：上級NNS）

→ 8-1 NSE2　そう、東京の、本当に日本の、栄えてる＜ところなんだけど＞ {<} „

9　NNSC　＜うん、はい＞ {>}。

→ 8-2 NSE2　いろんなお店とか、このバスタ新宿って大きなところ＜とかあって＞ {<} „

10　NNSC　＜うんうんうん＞ {>}。

→ 8-3 NSE2　ってゆうところってゆうのと、二個目のコースとしては、日本の神社に触れようってことで、浅草、なんだけど、行ったことありますか？。

11　NNSC　浅草は、行ったことあります。

ここでは、NSE2がNNSCに新宿と浅草について紹介している。NSE2が8-1「そう、東京の、本当に日本の、栄えてるところなんだけど」の直後にNNSCが9「うん、はい」と言ったため、重なりが生じている。続いて、NSE2は8-2で「いろんなお店とか、このバスタ新宿って大きなところとかあって」と新宿を紹介している時に、NNSCが10で「うんうんうん」というあいづち打って再び重なりが生じ、NSE2は8-3「ってゆうところってゆうのと、二個目のコースとしては、日本の神社に触れようっ

てことで、浅草、なんだけど、行ったことありますか？」と言って浅草の紹介を始める。NSE2の8-1～8-3は従属節が続き、一発話におけるモーラ数は140に及ぶが、NSE2の発話は、NNSCの理解を示す「あいづち」によって「受動的話者交替」[8]が２回行われるのみであることが分かる。

このように、接触経験の多いNSは、初中級NNSに対しては短い一発話の中でもNNSの理解を確認するために意識的に「間」を置いて「話者交替」を行うのに対して、上級NNSに対しては従属節を含んだ長い一発話を一気に話そうとすることが把握された。これは、接触経験の多いNSが、自由会話の段階でNNSの日本語能力を認知した[9]ことによって、NNSの日本語能力の違いに意識を向け、相手の日本語能力に合わせて「一発話の調整」を行ったためと考えられる。日本語能力の高いNNSに短文を並べてゆっくり話すと、NNSは自分の日本語力が過小評価されていると感じる（坂本他1989）ことを、NSは接触経験を重ねることによって認識するようになったことが推測される。

以上のことから、接触経験の多いNSは、CATの枠組みでは、初中級NNS、上級NNSのどちらに対しても、相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積り、コミュニケーションを効率的に行おうとする「認知面」の「収束」ストラテジーと、相手との心理的距離を縮めようとする「感情面」の「収束」ストラテジーの双方を用いていると解釈されるだろう。

フォローアップ・インタビューにおいては、上級NNS、初中級NNSのどちらも、接触経験の多いNSの話の方が「分かりやすくて、全部理解できた」と高く評価していた。これは、接触経験の多いNSが「一発

8 雷（2022）では、先行話者が自発的に区切ったわけではなく、後行話者の発話と重なったために受動的に発生した「話者交替」を「受動的話者交替」とした。
9 フォローアップ・インタビューにおいて確認された。

話の調整」を相手の日本語能力に合わせて適切に行った「収束」ストラテジーの結果とも考えられるのではないだろうか。

4.2.2　NSの「先取り発話」について

雷（2023）では、接触経験の多いNSは、上級NNS、初中級NNSのどちらに対しても「先取り発話」を積極的に用い、NNSの発話に滞りがない場合でも、相手の言いたいことや聞きたいことを文脈上の手がかりから予測し、「共有された情報や一般知識」を活用して「共同発話」を成立させていることが分かった。以下にそれを示す談話例を挙げる。

例８は初中級NNSとの談話である。

例８（NSE7：接触経験の多いNS、NNSm：初中級NNS）

→208-1　NNSm　漢字が良くないので,,

209　NSE7　ああ確かに＜笑い＞。

→208-2　NNSm　それで、うーん、ここで【【。

⇒210　NSE7　】】うん、結んで。

211　NNSm　うん、はいはいはい。

212　NSE7　うんうん。

213　NNSm　＜笑い＞良くない。

214　NSE7　良くない＜笑い＞。

この前に、NNSmが、以前浅草に行った時に浅草寺でおみくじを引いた経験を話しており、ここでは、NNSmがそのおみくじについて説明している。NNSmが208-1「漢字が良くないので」、208-2「それで、うーん、ここで」と言ったところで、NSE7が続きを予測して210「うん、結んで」と先取りしている。ここでNSE7は、NNSmの208-1「漢字が良くないので」によってNNSmが凶のおみくじを引いたと予測して「凶のおみくじを引いた時には、神社に結んで帰る」という一般知識に基づいて先取りし、「共同発話」が成立している。このように、NSE7が「（凶のお

みくじを神社に）結んで」と先取りすることによって、NNSmと共通の土台に立っていることを示し、そのあと「凶のおみくじ（を持って帰るの）は良くない」という一般知識を確認し合っている様子が観察された。

例８では、NNSmの先行発話に「発話遂行滞り」がなくても、NSE7は先取りをしている。初中級NNSの先行発話に「発話遂行滞り」がない場合に生起する「先取り発話」は、接触経験の多いNSの場合15例中10例で全体の約66%を占めているのに対して、接触経験の少ないNSは６例中１例のみであった[10]。接触経験の多いNSは、初中級NNSが対話相手であっても、既出情報や一般知識を活用して、相手の言いたいことを速やかに察知して先取りし、NNSと協働的に文を続けていこうとする様子が窺えた。

例９は上級NNSとの会話である。

例９（NSE1：接触経験の多いNS、NNSA：上級NNS）

→132-1　NNSA　じゃあ、そうすると、まず浅草寺に行＜って＞ {＜}„

⇒133　NSE1　＜って＞ {＞} *[声を大きくして]*。

→132-2　NNSA　終わってから【[。

⇒134　NSE1　]】浅草寺、仲見世通ってって、あのう、お参りするとこがあるから（うん）、そこで見てって…。

→135　NNSA　うん、で、もし、まあ余裕が＜あれば＞ {＜}。

⇒136　NSE1　＜あれば＞ {＞} *[声を大きくして]*。

→137　NNSA　また、こう、東京＜スカイツリーとか＞ {＜}【[。

⇒138　NSE1　]】＜スカイツリー＞ {＞} 行って… *[声を大きくして]*。

10 雷（2023）では「先取り発話」を、先取りする情報の帰属によって①先行話者に帰属する情報②後行話者に帰属する情報③共有情報及び一般知識、の三つに分類した。ここで示したのは「③共有情報及び一般知識の先取り発話」の「対初中級場面」の数値である（雷2023: p.177）。

139　NNSA　うん。

140　NNSA　でも、うん、チケットも早めに予約しといた方がいいんで＜すね＞ {＜}。

この前にNSE1が浅草に行く場合の遊び方について紹介し、ここでは、NNSAがNSE1の紹介した浅草の遊び方をまとめている。NNSAの132-1「じゃあ、そうすると、まず浅草寺に行って」の最後の部分でNSE1が先取りをして、132-1「って」と重ねている。次に、NNSAが132-2「終わってから」と言った直後に、NSE1が134「浅草寺、仲見世通ってって、あのう、お参りするとこがあるから、そこで見てって」と続けている。続いて、NNSAの135「うん、で、もし、まあ余裕があれば」の途中でNSE1が136「あれば」と先取りをして、135の「あれば」と重ねている。最後に、NNSAの137「また、こう、東京スカイツリーとか」の途中で、NSE1が138「スカイツリー行って」と先取りをして、137の「スカイツリーとか」と重ねている。NSE1による「先取り発話」133、134、136、138は、すべてNNSAとNSE1のどちらも知っている共有情報である。132～138の発話連鎖は「共同発話」の連鎖であり、例９は、NSE1とNNSAが共有情報を用いた「共同発話」の連鎖によって協働的に「浅草の遊び方」をまとめている談話と言える。

例９のNNSAの先行発話132-1、132-2、135、137には、どれも明確な「発話遂行滞り」が現れていない。このように、接触経験の多いNSが上級NNSの先行発話に「発話遂行滞り」のない場合に行った「先取り発話」は30例中18例、全体の約60%を占めていたのに対して、接触経験の少ないNSは４例中２例であった[11]。

「共同発話」の機能について、黒崎（1995）は、「共話は、すべてを言

11　ここで示したのは、「③共有情報及び一般知識の先取り発話」の「対上級場面」の数値である（雷2023: p.177）

い尽くさず相手に発話完結の機会を与えようとする話し手側の気配りと、積極的に共感の情を表そうとする聞き手側の気配りによって成り立っている」（p.59）と述べている。また、宇佐美（2006）は、日本語の共同発話文は、一般常識や百科事典的知識を活用しながら、互いの心理的距離を縮めるストラテジーとして機能していると論じている（p.122）。接触経験の多いNSが、NNSの日本語能力に関わらず「先取り発話」を多く用いて「共同発話」を成立させていたのは、それぞれのNNSに対して意識的に配慮し、歩み寄ることによって、NNSに心理的に「収束」しているためであると解釈される。接触経験の多いNSは、NNSとの日常的な接触経験を通して、初中級NNS、上級NNSのどちらに対しても心理的距離を縮める「感情面」の「収束」ストラテジーを発達させ、「混然一体となった一本の流れ」（水谷1995: p.5）を作るような協働的なコミュニケーションを志向するようになったことが推測される。

これに関して、接触経験の多いNSとの実験後のフォローアップ・インタビューで、NNSが「日本人との会話は楽しかった」、「日本人との会話は親近感を感じた」、「とても話しやすくて、会話の後、連絡先を交換した」という感想があったことから、フォリナー・トークを受け取る側のNNSも、接触経験の多いNSの積極的な歩み寄りを感じ取っていたことが窺える。

５．まとめ及び今後の課題

本稿では、雷（2022・2023）で得られたNSの「一発話の調整」及び「先取り発話」の調整ストラテジーについて、CATを援用して、理論上の解釈を試みた。

接触経験の少ないNSが、「一発話の調整」では、相手の日本語能力に関わらず終止形で終わる短い発話を用いていたのは、初中級NNSには、

相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積ってコミュニケーションを効率的に行おうとする「認知面」の「収束」ストラテジーが働き、上級NNSには、NNSの日本語能力の低さを想定したステレオタイプによる「過剰収束」が働いていると解釈された。「過剰収束」は、上級NNSの「日本語能力を過小評価されている」という不満を引き起こす恐れがあり、相手から遠ざかる「分岐」ストラテジーと捉えられる可能性が指摘された。また、相手の日本語能力に関わらず、ほとんどの「先取り発話」がNNSの発話が滞った場合に「助け舟」として使われていたことは、相手のコミュニケーション上のニーズに合わせてコミュニケーションを効率的に行おうとする「認知面」の「収束」ストラテジーとして解釈された。一方で、NNSに発話の滞りがない場合にはほとんど先取りをしないことから、相手の発話に踏み込んで相手の発話を遮る「先取り発話」の使用は控えるという、ある意味、NNSに対する「配慮」と言えるものが想定された。そのため、基本的には、「分岐」ではなく、言語調整せずに自分のスタイルを継続する「維持」ストラテジーが働いていると考えられる。

それに対して、接触経験の多いNSは、「一発話の調整」「先取り発話」ともに、NNSの日本語能力に合わせて適切な調整が行われていたことから、相手のコミュニケーション上のニーズや特徴を見積って効率的にコミュニケーションを行おうとする「認知面」と、相手との心理的距離を縮める「感情面」の、両方の「収束」ストラテジーが働いていると解釈された。

以上のことから、NSは、CATの枠組みで考えると、NNSとの接触経験を積むことによって、コミュニケーションを効率よく進める「認知面」の「収束」ストラテジーだけでなく、相手との心理的距離を縮める「感情面」の「収束」ストラテジーを発達させていることが明らかに

なった。NSは、NNSの日本語能力を見極め、相手のNNSの日本語能力に応じて一発話を適切に調整したり、「共同発話」を成立させる「先取り発話」を用いたりすることによって、NNSとのコミュニケーションにおいては、NNSの日本語能力に対する意識的な配慮とNNSへの心理的な歩み寄りが重要な役割を果たすことを理解するようになったことが推測される。NNSとの接触経験によって身に付けたこのような「認知面」、「感情面」の両面における「収束」ストラテジーは、NNSとの接触場面だけでなく、母語場面を含めたあらゆるコミュニケーション場面で有効に働くものと考えられることから、NSの「コミュニケーション力」を向上させるもの（庵2016・2021）として捉えられるのではないだろうか。

雷（2022・2023）の調査では、NS、NNSの属性を20代女性に統一しているが、会話相手のNNSの母語は統一していない。NSの言語調整は、相手の年齢、性別、人種、などの言語外的条件と関係している（オストハイダ1999・2001・2005）ことから、今後は、NS、NNS双方の属性をさらに検討し、調査対象を広げていく必要がある。また、NSがNNSとの接触経験によって身に付ける言語調整については、CATの枠組みによるアコモデーション・ストラテジーのみならず、Brown & Levinsonのポライトネス理論とのかかわりも大きいことが予測される。NSによる言語調整を分析する理論的枠組みについても検討することを、今後の課題としたい。

【付記】本稿は、雷雲恵による2022年度博士論文『接触場面における日本語母語話者の「フォリナー・トーク」に関する研究―母語話者の接触経験と非母語話者の日本語能力が及ぼす影響に着目して―』（文教大学）の内容の一部を発展させたものである。

【参考文献】

1）庵功雄（2016）『やさしい日本語―多文化共生社会へ―』岩波書店

2）庵功雄（2021）「日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味」『一橋日本語教育研究』9, pp.121-134

3）池田広子（2004）「接触場面においてなぜフォリナー・トークは使用されるのか―アコモデーション理論の観点から―」『日本語教育研究』47, pp.69-82

4）宇佐美まゆみ（2006）「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較―「共話」、「Co-construction」現象の再検討―」『高見澤孟先生古希記念論文集』pp.103-130

5）オストハイダ，テーヤ（1999）「対外国人行動と言語外的条件の相互関係」『日本学報』18, pp.89-104

6）オストハイダ，テーヤ（2001）「言語外的条件による過剰適応：コミュニケーション行動の言語社会心理学」『待兼山論叢. 日本学篇』35, pp.35-50

7）オストハイダ，テーヤ（2005）「聞いたのはこちらなのに…：外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐって」『社会言語科学』7(2), pp.39-49

8）御舘久里恵（1998）「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相―非言語行動を含めた談話過程の観察から―」『大阪大学日本学報』17, pp.111-123

9）栗林克匡（2010）「社会心理学におけるコミュニケーション・アコモデーション理論の応用」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』47, pp.11-21

10）黒崎良昭（1995）「日本語のコミュニケーション―「共話」について―」『園田学園女子大学論文集』30(1), pp.45-60

11）坂本正・小塚操・架谷眞知子・児﨑秋江・稲葉みどり・原田知恵子（1989）「「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69, pp.121-146

12）サックス, H.・シェグロフ, E. A.・ジェファソン, G.（2010）「会話のための順番交替の組織―最も単純な体系的記述―」『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織―』西阪 仰［訳］世界思想社, 5-153（Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G.（1974）. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*. 50(4), pp.696-735.）

13）志村明彦（1989）「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68, pp.204-215

14）スクータリデス, アリーナ（1981）「外国人の日本語の実態―(3) 日本語におけるフォリナー・トーク―」『日本語教育』45, pp.53-62

15）筒井千絵（2008）「フォリナー・トークの実際―非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違―」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.79-95

16）林宅男編（2008）『談話分析のアプローチ―理論と実践―』研究社

17）平山紫帆（2019）「接触場面と母語場面における母語話者のくり返し―日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から―」『社会言語科学』22(1), pp.233-248

18）水谷信子（1995）「日本人とディベート―「共話」と「対話」―」『日本語学』６月号, pp.4-12, 明治書院

19）柳田直美（2015）『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略―情報やりとり方略の学習に着目して―』ココ出版

20）雷雲恵（2021）「相互行為の参与者はどのように発話のトラブルに対処するか―接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着

目して―」『言語文化研究科紀要』7, pp.79-101

21）雷雲恵（2022）「日本語母語話者は接触場面においてどのように一発話を調整するか―母語話者の一発話の「長さ」と「話者交替」に着目して―」『言語文化研究科紀要』8, pp.109-136

22）雷雲恵（2023）「接触場面における日本語母語話者による「先取り発話」について―母語話者の接触経験と学習者の日本語能力が及ぼす影響に着目して―」『社会言語科学会第47回大会発表論文集』pp.175-178

23）ロング，ダニエル（1992a）「対外国人言語行動の実態」『日本語研究センター報告』1, pp.57-81

24）ロング，ダニエル（1992b）「日本語によるコミュニケーション―日本語におけるフォリナー・トークを中心に―」『日本語学』11（13），pp.24-32

25）Dragojevic, M., Gasiorek, J. & Giles, H.（2016）. Accommodative strategies as core of the theory. In Giles, H.（ed.）*Communication accommodation theory: Negotiating personal relationships and social identities across contexts*.（pp.36-59）Cambridge University Press.

26）Ferguson, C.A.（1981）. 'Foreigner talk' as the name of a simplified resister. In Alexandre Duchêne.（ed.）*International journal of the sociology of language* 28,（pp.9-18）De Gruyter Mouton.

27）Gasiorek, J.（2016）. Theoretical perspectives on interpersonal adjustments in language and communication. In Giles, H.（ed.）*Communication accommodation theory: Negotiating personal relationships and social identities across contexts*.（pp.13-35）Cambridge University Press.

28）Giles, H., Mulac, A., Bradac, J. J. & Johnson, P.（1987）. Speech

accommodation theory: The first decade and beyond. In McLaughlin, M. (ed.) *Communication yearbook 10*. (pp.13-48) SAGE Publications.

29) Giles, H., Coupland, N. & Coupland, J. (1991). Accommodation theory: Communication, context, and consequence. In Giles, H., Coupland, J. & Coupland, N. (eds.) *Contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics*. (pp.1-68) Cambridge University Press.

30) Giles, H. & Ogay, T. (2007). Communication accommodation theory. In Whaley, B. B. & Samter, W. (eds.) *Explaining communication: Contemporary theories and exemplars*. (pp.293-310) Routledge.

31) Zuengler, J. (1991). Accommodation in native-nonnative interactions: Going beyond the "what" to the "why" in second-language research. In Giles, H., Coupland, J. & Coupland, N. (eds.) *Contexts of Accommodation: Developments in applied sociolinguistics*. (pp.223-244) Cambridge University Press.